

『食道楽』作家・村井弦斎にみる消費者教育

石 田 あゆう

0. 序論——台所からみた消費生活

加工食品やファーストフードに代表されるアメリカ型食生活は、消費社会における問題の一つとして取り上げられる。例えば、食品添加物や遺伝子組み替え食品、栄養面での偏りなどである。だが、そこには食品のこと以上に、消費社会と日本の食文化、または従来の家庭における食事形態の変容についての問題である。

こうした調理、食品類の変化が主婦を家事労働から少なからず解放し、献立を考える手間を省いた一方で、「家族がバラバラにひとりで食べる」ことも可能にし、栄養バランスのとれた個性あふれる「家庭料理」の崩壊が「食」の消費化にともなって生じてきたというわけである。

そこで積極的な意味を見出されたのが、家事の合理化によって節約された時間を地域活動に当て、社会参加するようになった女性たちであった。この活動への参加者は「家庭」ときはなされたところに存在したのではない。「生活」を重視し、家庭における日々の食生活を見直すという身近な問題をきっかけとして、よき「消費者」となることを期待されていたからである。この「消費者」は従来のそれとは区別され、「生活者」と呼ばれた。なぜなら、流行に左右されやすく、企業からの情報に頼って商品を購入する「消費者」は主体性が希薄であり、それに対して、それぞれの生活理念に基づき、商品を積極的に吟味する「生活者」の自律性が評価されたからである。天野正子はそこに消費者とは異なり、生活者の操作されにくさを指摘する¹。

この操作されやすい消費者を生み出すとして、批判の対象となってきたメディアが女性雑誌である。例えば、諸橋泰樹はジェンダー論の視点から、女性雑誌が女性の欲望を喚起し、女性が流行を追って衣装や化粧品を消費することで性役割が強化されていると述べ、消費社会のメディアのあり方を問題とした²。そこには、「消費者」とどまり「生活者」

¹ 天野正子『「生活者」とはだれかー自律的市民像の系譜』1996、中公新書、164頁。

² 諸橋泰樹『雑誌文化の中の女性学』1993、明石書店、44頁。他に、井上輝子「女性雑誌研究の現代的意義」『女性雑誌を解読する』1989、垣内出版を参照。

になりきれない、メディアに操作される女性読者が存在する。こうした雑誌に踊らされる女性読者を指摘し、メディアを批判する視点は、日本において消費文化が花開いた大正から昭和初期にも存在しているあたり、女性雑誌と「生活者」の間には深い溝あることが見て取れる³。

多様な商品があふれる消費社会について、加藤秀俊は情報化の文脈で次のように論じている。商品だけでなく、それにまつわる数多くの情報の中から、消費者が自分に合うものを自主的に選ばなければならない現代は、「たいへんな時代」である。雑誌に掲載されているドレスは万人むけではない以上、使用者の個性とかみ合わないモノは商品として不必要である。そのため、消費者はそれぞれの思想的立場で、メディアの情報に惑わされることなく、自主的にモノを選択することが求められるのである。

その消費基準として加藤が注目するのが台所である。百貨店の「家庭用品」売り場の拡大や、必要とされる台所道具や器具の増加に見られるように、自由にとりよりも無限の「台所改善」が可能となった。つまり、このモノが大量消費される時代には「われわれひとりひとりが台所哲学をもたなければならない」と加藤は論じた⁴。

なぜ、ここで台所なのかといえば、加藤が日本の「豊かさ」は社会に限定されており、家庭とは断絶したところに実現していると考えているからであろう。生産の場である企業中心の社会が豊かであっても、消費の中心的空間である家庭においてそれが享受されていなければ、本当の意味での「豊かさ」は存在しないからである⁵。

こうしてみると、真の豊かな社会は、物質的にだけでなく、家庭の消費者が主体的に消費行動に関わるようになったとき訪れるというわけだ。その消費の思想として「台所」、つまり食生活の見直しが掲げられるのである。先の食のあり方から導き出された「生活者の思想」も含まれよう。消費によって成立する家庭の空間を、生産中心主義の企業に対置させることで、社会の見直しが図られているのである。それは、会社で働く「男性」的な生産活動の論理からではなく、家庭で家事を行ってきた「女性」的な消費活動から社会を見直そうとするものであり、「女性」的視点を回復しようとしているといえる。

これまで、「食」の中心的担い手は料理が家事労の一つであったこともあり、たとえ料理人に男性が多いといっても、女性的イメージが強い。その女性が、男性と同様に生産活動に関わることで社会参加を求めるようになると、家事労働はマイナスのイメージしかない。

³ 例えば、「婦人雑誌の浄化」『家事及び裁縫』1928、8月号など。戦前の婦人雑誌批判については拙稿「大正期婦人雑誌読者にみる女性的読書形態」『京都社会学年報 6』1998を参照。

⁴ 加藤秀俊「台所の思想史」『食の社会学』1978、文藝春秋、234頁。

⁵ 加藤秀俊「あらたな庖丁人」『日常性の社会学』1974、文化出版局、133頁。

だが、消費動向のあり方を考え、豊かな生活を実現していく行為として家事を見直せば、大きな意味ある労働となる。その意味で消費の見直しが行われようとしているのである。

そこで、こうした消費者像を、明治時代に描いていた一人の人物に注目してみたい。『食道楽』という食生活の重要性を指摘する小説を書き、消費の空間としての「家庭」を重視して、近代日本の消費者に少なからず社会的影響をもった村井弦斎である。加藤秀俊も、この村井弦斎に新しい時代の日本にふさわしい生活文化の精神についてヒントを見出そうとしている⁶。

本稿は、明治期に食生活が変化する過程で、いかに対応するかを消費者の視点から説いた村井弦斎の議論から、日本の消費者教育を考えるものである。後述することになるが、村井弦斎は、小説や雑誌を通じて「家庭料理」の普及に務め、台所と女性の関係を強化することで消費者について論じている。その過程は特に 1906（明治 39）年に実業之日本社から創刊された雑誌『婦人世界』で展開された議論を中心にみていくことにする⁷。

牟田和恵によると、日本で「家庭」が女性の領域として論じられるようになったのは近代日本の国民国家形成期の明治 30 年から 40 年代である。この時期、総合雑誌から「家庭」をテーマとした論説が消え、近代的性役割の登場にともない、それは私的な女性の空間として語られるようになるという⁸。この「家庭」の担い手である女性は、家事を引き受け、将来の国民を育てる良妻賢母として近代日本を支えたのであり、こうした女性の性役割の登場は、その国民化過程でもあった⁹。ここでは、それと同時に、女性が良き消費者であることが求められていった経緯を、「家庭料理」が普及するプロセスとともにみていきたい。

その背景には、「今日は帝劇、明日は三越」¹⁰に出かけるようになった消費者が登場した、明治末期の 1910 年代初頭に生成した消費社会の存在がある¹¹。ここに 1960 年代の大量消費社会への契機をみることもできることを考えれば、今日の消費者を考える上でも有効で

⁶ 「料理を苦痛にみちた家事労働としてでなく、よろこびの行為としてとらえなおすことはできないものなのであろうか。（中略）明治時代には村井弦斎のような、すぐれた庖丁人の精神をもった人物があらわれた。いま、日本の生活文化が必要としているのは、おそらくこの新しい時代にふさわしいあらたな「庖丁人」なのである。」（加藤、前掲書、1974、214 頁）。

⁷ 村井弦斎については、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第 27 巻』に著作年表、また尾崎秀樹、小田切進、紀田順一郎監修長山靖生編『少年小説大系第 13 巻 森田思軒・村井弦斎集』1996、三一書房にも年譜があるが、本稿では最新の『時代の先駆者 よみがえる村井弦斎—明治の実用小説家』2000、平塚市博物館にある年譜にならう。

⁸ 牟田和恵『戦略としての家族』1996、新曜社。

⁹ 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』1999、勁草書房。

¹⁰ 明治 44 年に帝国劇場の「ハムレット」のチラシに使われた三越呉服店の名コピー。

¹¹ 山本武利「百貨店と消費革命」山本武利・西沢保編『百貨店の文化史—日本の消費革命』1999、世界思想社。

あろう。

まず、第一章では、村井弦斎を現代にも通じる消費者教育家と位置づけるうえで、これまで論じられてきた村井弦斎像を再考し、彼が「家庭」の消費者と結びついていった過程について考察する。第二章では、「家庭料理」が普及するなかで、彼が「料理」を女性と結びつけ、そこで消費者を意識するようになったことを述べる。第三章では、具体的に村井弦斎が展開した消費者論を取り上げ、その内容について考察する。その上で、最後に村井弦斎の議論について検討する。

1. 「家庭小説」作家から「家庭教育家」へ

1-1 「家庭」に歓迎された村井弦斎

村井弦斎といえば家庭小説家として取り上げられるのが一般的である。村井には、他に少年小説、冒険小説、SF小説など多様な作品があるが¹²、やはり「家庭」と切り離せない点が彼の特徴である。

家庭小説研究を行った加藤武雄によると、家庭小説とは通俗小説の一つであり、何より読者の要求につとめた小説と位置づけられる。家庭で読まれるのにふさわしい小説が「家庭小説」であり、そのため、「家庭小説という言葉は予想された読者の種類によって規定された言葉で、材料から規定された言葉ではない」と論じられる¹³。つまり、家庭小説の作家は、まずなによりも読者の要求を作品に反映させることができること、その上で、読者に選ばれることがその条件として重要となる。

それを受けて瀬沼茂樹は、明治期の家庭小説を「健全な家庭読物主義」と論じ、「本来、日本の封建的家族制の持続の上に、儒教的な道徳と市民的愛情倫理を争わせながら、そのような家族主義を動かすことのできない前提として、生まれてきた特殊な形態」と述べる¹⁴。そこで、村井の小説に登場する女性たちが儒教主義的精神の持主であることに注目し、彼の作品を「家庭小説」の典型とした。「家庭」に規定され、近代的価値観から取り残されがちな女性の慰安となり、女性に愛情の力を説くことで勇気づけたのが「家庭小説」であると瀬沼はみるからである。

さらに、いくつかの家庭小説が百貨店などとタイアップして宣伝を行い、流行を生み出

¹² 村井弦斎の少年小説については、長山靖生「解説 村井弦斎」長山編、前掲書、1996を参照。また、村井弦斎をSF小説の作家として位置づけたものとして、横田順彌「明治人 驚異の予言者は村井弦斎」『This is 読売』1998.1を参照。

¹³ 加藤武雄「家庭小説研究」『日本文学講座 14 大衆文学篇』1933、改造社、57頁。

¹⁴ 瀬沼茂樹「家庭小説の展開」『明治文学全集 93 明治家庭小説集』1969、筑摩書房、430頁。

したことを取り上げ、「家庭小説が単なる家庭読み物の段階から、女性の日常生活に食い入っていったことであり、「流行」という不動的な生活気分をつくりだし、またこれと結ぶことによって、新聞紙の拡売に大きな力をもつようになった」と述べ、「映画産業の発展以前に、現代の映画・テレビ・服飾産業の担う役割を、果していたということができよう」と論じる¹⁵。

こうしてみると、家庭小説はなにより、消費される大衆文化の先駆として位置づけることもできる。家庭小説が読者に選ばれることで成立していたことを考えれば、「慰安」だとしてもそこには読者の積極的な受容形態がみてとれる。その結果、消費社会の進展にも大いに寄与したのである。現在でこそ、忘れられた家庭小説の作家だが、「その長き生涯を家庭小説に殉じきった人を求めるとするならば、村井弦斎においては他に断じてない」と言われ¹⁶、特に人気を博したのが村井弦斎だった。

次に、村井について、読者に支持される作品を書いていた人物であったこと注目し、振り返ってみたい。

1-2 大衆的ジャーナリストとしての手腕

村井弦斎は本名を寛（ゆたか）といい、1863（文久 3）年に生まれた。青年期には露西亜語を学び、その後アメリカにも留学した経験をもつ、当時の知識人の一人であった。

その村井は小説家であると同時に、ジャーナリストでもあった。1894（明治 27）年、経営不振にあった『郵便報知新聞』の立て直しに成功したという実績をもつ¹⁷。「編集総理」として、『郵便報知新聞』を『報知新聞』と改題し、新聞の社会的機能と実際の新聞経営との狭間で不特定多数読者の獲得に成功、購買層の拡大という功績を挙げている。そして自ら執筆した新聞連載小説も好評を博し、販売部数の増加に貢献した。

だが、村井のとった編集方針は当時の新聞人からは批判され、また小説のほうも文学者からの評価は低かった。元来「大新聞」の一つであった『郵便報知新聞』では、「小説の上で物を説こうとするのは、それがあの人の一番悪い癖でした。（中略）あの利口な人がどうして其処に気が付かなかったのでせう」と、その読者拡大のための「小新聞」的になった紙面への反発があった¹⁸。

一方、新聞の連載小説については、1896（明治 29）年の『帝国文学』第 2 巻第 12 号を

¹⁵ 瀬沼茂樹、前掲書、428 頁。

¹⁶ 「総序」『現代日本文学全集第 34 巻 歴史家庭小説集』1928、改造社。

¹⁷ 『報知新聞』と村井弦斎については、報知新聞社編『報知七十年』1941、報知新聞社を参照。

¹⁸ 同上、90-104 頁。

みてみよう。「家庭と文学」と題された雑報において、「日本の家庭の低度（マ）は卑し」いが、村井の「作れる数十篇の小説は高尚ならざるも卑猥ならず、父子姉妹の間に読みて、顔を赤うすべき節一もなし。彼の意を用ゐる太だ好し」とあり、家庭教育に役立つと評価された。だが、文学者としては、「世に弦斎という小説家あり。彼れ小説家としては第三流以下なるべし」とされている。村井の読み物は「家庭」で読まれる「新聞小説」という限定つきで「良家庭の読み物」¹⁹の筆頭に挙げられたのであった。

どちらにしろ言論界や文壇では評価されなかった。しかし、それが読者の役に立ち、受容されたという点では抜きんでていたのである。『報知新聞』の読者層を分析した山本武利は、例えば村井の6年にもわたる連載小説「日の出島」が、地方家庭読者、及び女性読者を開拓し、その支持の大きさを明らかにしている²⁰。

先の評価は村井が良くも悪くも当時の読者の要求にこたえていたことの裏返しでもあろう。「大衆小説」が登場し、大衆読者が無視できない存在となった昭和に入ってから、村井を「彼は新聞政策（マ）の一方便として、極めて大衆向けの小説を意識的に政策販売した希代の新聞人だったのである」と評価する声がある²¹。

弦斎による誌面改革後、『報知新聞』に寄せられた投書には次のようなものがあつた。1899（明治32）年12月6日付けのものに、「諸種の新聞怠りなく閲覧する中に貴社新聞は婦女子の教育のために特に注意せられ候段、我々家庭のために感佩の至りに候。殊更に近日御掲載相成候人物と甚平生は実に有益に趣味多く感じられ、毎日貴紙の到着を待ちて家人に読みきかせ、且つ自分の意見を附して教訓の一助となし申居候」とあり、婦女子のみならず、家長からも「有益」とされていた。

村井弦斎の編集手腕により「親子の前でも読める」家庭新聞となった『報知新聞』は、その後、羽仁もと子を始めとして他紙に先鞭をつけて婦人記者を採用し、家庭記事の充実につとめた。また、新聞でははじめて写真を掲載したのも『報知』である。1904（明治37）年、正月の初刷りの紙面で、後の婦人雑誌並みに女官や女優の顔写真を各ページに掲載し、世間を驚かせた。

村井弦斎は読者の支持を得て、「家庭」に歓迎される紙面に村井の家庭小説が連載されたわけだが、ここで読者に提示されたのが、理想的「家庭」像である。村井の連載小説は女性の慰安となり、新聞の売上げを維持する以上に、近代日本家庭の一つの理想を描いて、

¹⁹ 『中央公論』1903.6月号の投書。

²⁰ 山本武利『近代日本の新聞読者層』1981、法政大学出版局。

²¹ 蛭原八郎「村井弦斎小論」、1934、『明治文学雑記』（書誌書目シリーズ38）1994、ゆまに書房、81-95頁。

読者に積極的に受容されていった。特に、『報知新聞』で1903（明治36）年に連載された『食道楽』は、近代日本の新しい「家庭」の登場に一役かうことになる。

次章では、この『食道楽』について考察し、彼が小説のなかで展開した「家庭」論を見ていくことにする。

2. 『食道楽』にみる近代日本の理想的「家庭」像

2-1 学校教育よりも「料理中心」の家政教育を

読者に役立つ記事であるためには記事を何度となく推敲し、内容の更新に努める必要がある。そう考えた村井弦斎は、出版社による原稿の買い切りを嫌って、自らの作品を途中から自費出版するようになる²²。『食道楽』も始めは自費出版された作品であった。だが思わぬ結果として、読者に支持されて売上げをのぼし、村井は印税による生活を実現させた²³。『食道楽』はその後、増補改訂版や続編も出版され、情報の更新が行われた、当時のベストセラー小説である。

食材の豊かさ、料理法の多様さが話題を呼んだ『食道楽』は明治30年代以降の消費生活の手引きとなっていた。この時代の「食」を均一化し、大衆に浸透する料理を説いたとしてマニュアル本として『食道楽』をとらえ、その生成プロセスに「ネイション・ビルディング」をみる視点もある²⁴。つまり、『食道楽』が「計量」によって「料理」をマニュアル化したことにより、専門料理の簡略化を通じて専門料理と区別される「家庭料理」を登場させたからである。

『食道楽』が『報知新聞』で連載された明治36年といえば、日本の言説空間において「家庭」や家族がもっぱら女性を対象として女性にのみ関わるものとして語られるようになった時期である。この時期に誕生した「家庭」において食せられる「料理」もここに新たに登場したと考えることができるのだが、家庭料理は実際の行為をとまなうものであるだけに、言説レベルにとどまらない部分が存在する。さらに家庭料理の登場は女性の国民化過程であったが、と同時に、女性が消費者として現れてくることも意味していた。

²² 村井米子「父 弦斎の想出」『復刻版 食道楽 解説編』1976、柴田書店、14頁。後に新聞連載していた報知新聞社より発行された。復刻版は村井弦斎『増補注釈 食道楽』全四巻、1903、報知新聞社のものである。

²³ 毎月三千円前後送金される印税に驚いた小田原銀行の当時の小西頭取は「子孫に小説家をさせようか」といったという。村井米子、前掲書、38頁。

²⁴ 村瀬士朗「＜食＞を＜道楽＞にする方法—明治30年代の消費生活の手引き」金子明雄他編『デイスクールの帝国—明治30年代の文化研究』2000、新曜社を参照。

飲食品の販売が拡大しつつあったこの時期、西洋料理を一般人も知るようになり、新しい食品、調理法、食器などの宣伝が次第に行われるようになる。鉄道に代表される輸送システムが整備され、人々が地方の食物と接触する機会も増加し、日本における従来の食生活も変化しはじめる。

そうした状況がある一方で、明治以降の女子教育では裁縫技術を偏重し、料理を軽視していた²⁵。裁縫は明治以前から女子の自立の一手段と考えられてきたこともあり、学校教育でもいち早く取り入れられた教科であった。その裁縫に比べて料理は特に女性に求められた役割ではなかったこともあり、女子教育では一般的ではなかった。料理人、料理番は一般的に男性であり、中産階級以上の家庭であれば、女中を雇って日々の料理をまかせていたことはよく知られている。

裁縫とともに料理学校が設立され、料理と裁縫とが並行する形での家庭科教育が発達していた欧米と比較すれば、日本の女子教育の「ゆがみ」は料理教育の「遅れ」といえるかもしれない。高等女学校の家事実習では「料理」は「割烹」実習と呼ばれ、1895（明治28）年より奨励されてはいたが、それは「家庭料理」というよりも教養の一貫としての料理であり、熱心に行われたのはむしろ文章や礼法、芸事であった。女学校におけるこうした傾向は昭和の初めごろまで残った。

確かに、西洋料理が紹介されはじめると、その家庭への普及を目指した料理学校が登場する。その第一号として有名なのが、1882（明治15）年に開校された赤堀峯吉の「赤堀割烹教場」である。だが、ここでも料亭料理屋が、上流階級の婦人達に「接待料理」を伝授するもので、日常的な家事の一つとしての料理を教えるものではなかった。

そこで女子に対する「家庭料理」の伝授に大きな役割を果たしたとされるのが新聞、雑誌といったメディアである。初期の料理記事はカレーライスのダシがかつお節だったり、牡蠣は衣を付けずにただ揚げるだけだったり、苦心の和洋折衷料理であったという²⁶。その意味では材料、器具の不備もあり西洋料理は一般家庭のものではなく、外食するものであった。その「食べに行く」西洋料理の作り方について確かな情報を伝授し、家庭での食生活の充実を小説仕立てでわかりやすく読者に説き、『報知新聞』の連載で好評を博したのが村井の『食道楽』であった。

連載開始三回前後は、村井家の料理レシピだったが、その後、大隈重信の協力を得て大

²⁵ 常見育男『家庭科教育史』1959、光生館、14-16頁。また、裁縫教育はその先覚者・渡辺辰五郎によって、1868（明治元）年の千葉県長南町に裁縫私塾をきっかけに、女子師範学校を経て、和洋裁縫伝習所（東京家政大学）、共立職業学校（共立女子大）がいち早く設立された。岡通子「渡辺辰五郎の近代的裁縫教育」高橋春子編『女性の自立と家政学』1981、法律文化社を参照。

²⁶ 小菅桂子『につぼん台所文化史<増補>』1998、雄山閣、87-99頁。

限家のコックが派遣されてきたり、また、アメリカ公使館に七年いたコックの加藤榊太郎（『食道楽』で榊次郎として登場）を雇ったりしながら、アメリカ留学の経験を持つ村井の舌で、実験を重ね、試食してよいと思われるものが「家庭料理」の一品として小説に取り上げられた。つまり、男性料理人たちが、「家庭」にふさわしいようにアレンジした料理を「家庭料理」として紹介したわけである。

村井が食にこだわった理由として「料理軽視」の学校教育よりも「料理中心」の家政教育が近代日本にとって必要だと考えていたことが挙げられる。『食道楽』には、「これまで学校の教育制度の取り調べには、幾百人の官吏が洋行したが、家庭教育の方は、一人もない。順序からいうと逆である」²⁷とあり、また、「家庭教育は実に広い問題だ。社会全体のことは、一つとしてその根本を家庭より発しないものはない。一口に一国の文明というけれども、家庭を基礎としない文明は、皮相の文明だ。まず人の家庭の文明が最初だ」²⁸と登場人物の一人に語らせる。

つまり、「家庭」は社会の補完的機能ではなく、むしろ基幹となるものであり、日本の社会改革のきっかけとなると考えられていた。その日本の社会改革のきっかけを生み出す場所が家庭であり、中心的役割を担うと考えられたのが女性であった。

村井は女性に料理を説いたが、と同時にそれは女性により消費者たることをすすめる意味もあった。村井弦斎は、流通する商品を自ら選別し、収集するための基準や方法を『食道楽』の登場人物を通じて語り、それを行う女性を理想とした。それにもともと、村井弦斎の小説に登場する女主人公は自立しようという意志をもった人物として描かれることが多い²⁹。小説『食道楽』において、そうした村井の考える自立する女性は、「料理」をする女性、お登和に行き着いたのである。

神戸、大阪、京都で料理の勉強を積み、今は兄と暮らす家の「主婦」であるお登和は、日々この家を訪れる客に、自慢の料理をふるまい、日本の近代化を議論する大学出のエリート男性陣に対し、お登和は「家庭料理」をその仕事とする理想の女性として描かれる。

しかし、お登和のような女性は現実には少なかったに違いない。女性が生産労働を退き、一般的に「主婦」が可能となるのはまだ先のことである。実際、この人気を博した『食道楽』は、歌舞伎役者がお登和を演じる娯楽としての舞台作品となり、また、「お登和軒」や「お登和亭」と名付けられた小料理屋が出現するなど、その影響はまず先に「家庭」内部

²⁷ 村井弦斎『食道楽』の引用は、村井米子編訳『食道楽』1976、新人物往来社から行った。村井弦斎（村井米子編訳）『食道楽』、203頁。

²⁸ 同上、254頁。

²⁹ 三瓶達司「村井弦斎の歴史小説瞥見」『東京成徳短期大学紀要』第19号、1986、16頁（『国文学年次部論文集 近代1』1986、学術文献刊行会所収、300頁）を参照。

よりも外部において見られ、消費される娯楽の一つとなった。『食道楽』を実際に家庭で実践できるほど、つまり女性を中心とした消費生活が営めるほどの家庭はそう多くはなかった。だが、その豊かな食生活への憧れ、それを担う理想的女性像は広く流布されることになったのである。

2-2 近代日本の家庭における『食道楽』の必要性

村井弦斎の『食道楽』が出版されたとき、それを受け取った矢野龍溪、報知新聞社社長は村井に次のような書簡を送った。

「先日貴著沢山ニ御投贈被下拝謝致候／世上二大歓迎之由／乍蔭御祝し申候／実益ヲ世に与る事請合ト存候／普通之料理法ノ書物ナドハ／頗ル解シ難ク／談ニ難ク／小生杯一読シテ解シ兼ル事多シ／畢竟ハ不文ノ為メナルト／記載の資料ノ乏シキト／不真切（マ）ナルトニ因ル事ト存候」³⁰。

つまり、『食道楽』が従来の料理本のわかりにくさを克服したことに加え、「食」に関する情報が充実している点をジャーナリストとして矢野は評価したのである。

さらに、『食道楽』がこの時期に変化しつつあった「家庭」という空間のモデルを提供していたことに注目する必要がある。

『月刊 食道楽』の「家庭料理の原則」をみると、「家庭」はかつて教育に代表される、「凡て厳肅なる意義を有して居った」場所だったにもかかわらず、現在は娯楽の意味が多分に含まれる場となり、窮屈な「血族間の小倶楽部」にかわって、「社会の圧迫から脱離した楽しい別世界、更にといふと世の中の桎梏制裁から受くる苦痛の慰藉地となった」という指摘がされている。つまり、「父教母訓の下にあった一種の学校ともいふべき家庭が、夫婦を中心とした一大揺籃に変じた」と論じられ、ここに、「家庭」が「社会」と切り離されたことによって、一つの安息地としての新たな場所となったことが評価されている。

この新しい「家庭」の特徴してあげられるのが物質的側面の拡大である。その結果、「人間に最も必要な衣食住といふものの上にも新意義が加はり、これが凡て家庭と結ばれて、生活といふ一面が頗ぶる発展することになった」³¹のであり、この時期にもたらされたモノの豊かさが生み出した新しい生活が積極的に評価された。

そこで最も重視されたのが「食」であった。「食」は健康と直接関係があるうえ、日々「採択取捨する権利」が与えられており、心がけ次第で「旨くて、滋養に富んで、そして値段の安い」ものが食べられるからである。こうして近來の家庭の研究に価値が見出され、そ

³⁰ 矢野龍溪／〔村井弦斎〕宛 封書 1903.11.5 神奈川近代文学館所蔵。

³¹ れう角「家庭料理の原則（一）」『月刊食道楽』第二卷第十三号、40-41頁。

の貢献度という点で挙げられるのが村井弦斎の『食道楽』であった。

「この書の小説としての価値は別問題にあるが、家庭料理の必要を唱へ、且つこれを許多の資料を供給した手柄は、決して没すべからざることと思ふ。」評されている³²。なぜなら先に述べたように、村井の『食道楽』は、従来とは異なる新しい意味での「家庭」に必要な「食」に関する知識、そして情報を提供した書物であったからである。『食道楽』は新しい生活を説いた書物として、それを支えるのに役に立つと考えられていたのである。

この『食道楽』の評判から、村井は当時の食物関係の新作である、味の素、カルピス、マシマロ（森永）などについての相談も持ち掛けられるようになった。日本の食品文化の誕生にも一役かったのである³³。

食品広告が売薬、出版、化粧品品の三大広告を伍して躍進するのは大正中期以降であるが、味の素はいち早く、1909（明治 42）年から宣伝をはじめた³⁴。その広告に村井弦斎は登場する。「この発明品は家庭料理に便利至極のもの」と存候」との言葉が、「＜食道楽＞著者村井弦斎先生来状」として広告文に使われている。「毎朝の食卓に欠くべからざる」とし、「経済と軽便とを欲せざる主婦には味の素の必要なし」との文面には、「家庭料理」に必要な経済性と、手軽に衛生面を含めた毎日の食事への気配りを「味の素」という商品によって実現できることが謳われていた³⁵。

3. 『婦人世界』の編集顧問・村井弦斎

村井弦斎が、『食道楽』で小説の形で展開した読者へのメッセージは、その後婦人雑誌を通じて届けられることになった。実業之日本社の社長である増田義一から直々の勧誘を受けた村井弦斎は、1906（明治 39）年に創刊された『婦人世界』の編集顧問となり、その後ほぼこの婦人雑誌にのみ寄稿した。

ここで、中心となる村井の言論活動の場が、新聞から雑誌へと移ったことは、その読者の問題からみて重要である。新聞は＜家族＞を中心とするメディアといえようが、婦人雑誌は特に＜女性＞読者を想定したメディアだからである。生活に役立つ情報を特に女性に提供することを目指した村井にとって、『婦人世界』は格好のメディアであったと考えられる。

³² 同上、41 頁。

³³ 飯田喜代子『『食道楽』における西洋料理の導入について』『全集日本の食文化 第 8 巻 異文化との接触と受容』1998、雄山閣。

³⁴ 内川芳美編『日本広告発達史（上）』1976、電通、91-92 頁。

³⁵ 味の素の新聞広告第一号は『東京朝日新聞』1909.5.26.である。同上を参照。

当時の発行部数の上でも³⁶、雑誌としてはじめて返品制を導入したという点でも、出版のマスセールの道を開いた雑誌であった³⁷。戦前の婦人雑誌としては、「主婦之友以上の（中略）婦人雑誌をつくることは不可能だらうと思はれます」³⁸といわれるほどの成功をおさめた、1918（大正 7）年に石川武美が創刊した『主婦之友』が知られている。村井弦斎も1921（大正 10）年の多嘉子夫人への書簡のなかで、「主婦の友は大勉強です。今は婦人世界の上でせう。」³⁹と評すほどであった。

だが、『婦人世界』が創刊された1906（明治 39）年には「女学世界、女鑑、ムラサキなどをみたが、発展の跡なし」と評し、「婦人画報も際立ち不用」と述べているように⁴⁰、自らがたずさわる雑誌への自信をのぞかせていた。1910（明治 43）年には、「婦女界と云う参り侯が驚く程のものに無之候」⁴¹とあり、『主婦之友』にその座を奪われるまでは『婦人世界』こそが「女性読者のための雑誌」であると自負していたことが読みとれる。

本格的な「大衆」雑誌は昭和の百万部雑誌『キング』（講談社雄弁会）を待たねばならないが、その『キング』も「婦人」意識して創刊されたという経緯を考えれば⁴²、『婦人世界』は大衆向けの雑誌としても、婦人雑誌としても出版史において先駆的存在として位置づけられる。

『婦人世界』では「料理」情報は、村井弦斎にかかわって夫人の村井多嘉子によって提供されるという形式がとられた。「弦斎夫人の料理談」は夫人と記者の問答形式という、現在のようなテレビの料理番組形式が採用されていたことも注目に値しよう。

3-1 良き消費者としての女性

消費行動において、まず消費者に求められるのがその選択眼である。この時期、消費は「家庭」に基づいて行われることが求められ、その中心的存在として「女性」が見出されていった。

日露戦争後の1906（明治 39）年に創刊された『婦人世界』は「諸姉が家庭を中心とする

³⁶ 小川菊松「日本雑誌界の父増田義一さんを思う」梅山紘編『増田義一追懷録』1950、実業之日本社。

³⁷ 石川弘義「婦人雑誌—婦人大衆文化の成立」石川弘義、尾崎秀樹『出版広告の歴史 1895—1941』1989、出版ニュース社。

³⁸ 平林初之輔「婦人雑誌雑感」『改造』1927、3月号。

³⁹ 村井弦斎／〔村井多嘉子〕宛封書 1921.2.2、神奈川近代文学館所蔵。

⁴⁰ 村井弦斎／〔村井多嘉子〕宛封書 1906.8.10、神奈川近代文学館所蔵。

⁴¹ 村井弦斎／〔村井多嘉子〕宛封書 1910.2.28、神奈川近代文学館所蔵。

⁴² 佐藤卓己「キングの時代—ラジオ的・トーキー的国民雑誌の動員体制」筒井清忠他編『近代日本文化論 7 大衆文化とマスメディア』1999、岩波書店、213頁。

の点に於ては良妻賢母たらんことを望むと同時に、家庭生活を基礎として、其性能に適合せる社会的活動を為さんことを望み」、誕生した。

女性を中心となって生活の秩序を守り、夫婦が相互に敬愛しあう家庭を『婦人世界』は「新家庭」と呼ぶ。「新家庭」には「日本婦人の独立」が不可欠であるとされ、「女子の独立的な精神とは、独立生活を言うにあらず」して、「女子の本分を全うし、婦人の天職を尽すに就いての独立精神なり、女子は男子の従者にあらず、附屬物にあらず」と述べられる⁴³。女性が子を育て、家を治め、社会に力を尽すことは男子の力に依頼すべきものではないからなのだが、女性の自立が以前の裁縫の生産性ではなく、家庭内の女性領域の確立にあると主張されていた。

女性が自立し、「新家庭」を築くうえでの知識を『婦人世界』は提供しようと創刊されたのであり、「諸姉が最も楽しき新家庭を作ること望み、殊に家庭の改良家政の研究に関して成るべく事実に憑拠して適切なる説明を加へ以て実践躬行に便ならしめんこと」を目標とした。

村井自身も日露戦争の経験からますます「家庭料理」の重要性を確信していた。1910（明治 43）年の「凱旋料理」と題された論考では、「遠地に在って不自由に暮らした人は国へ帰って御馳走を食べるのが何よりも楽しみでせう」と述べ、そのために国民は「食道楽の趣味を研究」し、「凱旋将士を満足させる」必要があると説かれている⁴⁴。

さらに創刊号には、「弦斎式料理服無料進呈」をうたった『増補注釈食道楽』の広告が大きく掲載されている。この「弦斎式料理服」とはいわゆる割烹着であり、今で言うエプロン（前掛け）よりも「新しい」とされた。これは看護婦の白衣をヒントに作られたもので、衛生的料理をつくるための服を意味した。家族の健康な身体をつくるために「食」にたずさわるのが女性読者である。

村井弦斎の執筆した記事は、時代によって基本的に変化することはなかった。1882（明治 15）年の「人世必要学問を論ず」との論考において、すでに、人が各自努めるべきは「衛生の法」と「経済の道」とであると論じられている⁴⁵。この後、その主張は家庭を治める女性に特化されていったわけである。

⁴³ 『婦人世界』は何が為に生まれたる乎『婦人世界』創刊号、1906、実業之日本社。

⁴⁴ 村井弦斎「凱旋料理」村井弦斎他編『新編 料理談』1910、金葉堂、15-17 頁。

⁴⁵ 村井楽水「人世必要の学問を論ず」『東京経済雑誌』第 444 号、1882、1738-1741 頁。「人体の組織を明晰し病理の本源を研究し養生の法を行ひて以て健康を保つを勉めざるべからざるなり 故に曰く余輩各自が第一につとめざるべからざるは衛生の法にして学ばざる可からざるは衛生の学なりと（中略）衣食住の需用を充たして而して最大幸福に樂境に達せん事を願はざる者はあらざるなり故に之を約言すれば人類は経済区域の中に生息して経済事業を行ふ者なり」、とあり、衛生と経済の重要性を説いている。

村井が創刊号で読者に説いた「節句の改良」では、節句の日に子供を歯医者へ連れて行くように決めておけば、子供の歯を悪くしないですむ、といった内容である。同様の記事は1922（大正11）年にも見られる⁴⁶。村井弦斎が『婦人世界』での主張した健康を保つための「衛生」や「養生」といったテーマは彼が1927（昭和2）年7月3日に死ぬまで一貫していた。

そうした「家庭療法」に続き、村井弦斎の書いた体験談や論説、小説において展開されたのが「消費者教育」である。

『婦人世界』明治42年第4巻第12号の「日本婦人は家庭趣味に富めり」では、「家庭の趣味といへば、西洋から伝来した新しい事のやうに聞えますけれども、ある方面から観察したら、我が日本人こそ遙に家庭趣味に富んで居て、西洋人は寧ろ社交趣味の人種ではないかと思はれます。」と論じられる。西洋と比較した上で日本の「家庭」を持ち上げ、日本の家庭に「料理」の趣味が加わった時、より一層強固なものになると述べる。

「昔風の婦人には、針仕事は何よりも好きだという人も多いやうでしたが、今どきの婦人は、裁縫趣味よりも料理趣味を養成したいものです。食物は家内全体の人の健康を養ふものですから、家の主婦たるものは、食物の趣味をもって居なければなりません」。そうやってこそ、「日本婦人は、家庭趣味を基礎として、これに社会趣味を加え、科学趣味や読書趣味を応用し、文明の道に進むのが、我が日本国の精神を発揮する所以でせう」と「家庭料理」を女性が身につけることを説いた。そこで重要視されたのが「買い物」である。

食生活を支える上で必要な女性の心得として、「實際生活—買物は如何にすべきか」（『婦人世界』明治39年第1巻第7号）では「買い物」の重要性が次のように説かれている。

「如何なる高貴の婦人でも毎日の買物は自分で出かけて行って、自分で品物を選ぶといふ習慣にしなければなりません。（中略）自分で買ふと八百屋の奥まで目をつけて、あそこになんがあるかと一々検査しますから、同じ代価でも上等の品物を選ぶことができます。」（同、10頁）

大正に入っても、「生活難に悩む主婦は此機会を善用すべし」（『婦人世界』大正11年第17巻第6号）では、「元来人間は独りで生れて来たものです。決して奉公人を伴れて生れて来たものではありません。されば自分一人の用事は自分一人で十分に達せる様に天から健全な手足を授かつてゐます」と説く。「同じ料理を作る時でも、料理人任せにすると、主婦が自ら手を下すのと、入費に於て殆ど半額位の相違があります。同じ様に八百屋へ行って物を買っても、奉公人が買ふのと、主婦が自分で買ふのとでは、よしんば代価は同じ

⁴⁶ 村井弦斎「育児上の知識を欠きし為子供の歯を悪くした失敗談」『婦人世界』第17巻第8号、1922。

でも、必ず物の品質が違って、主婦が買った方が必ず善良の物を選びます」(同、38 頁)と、主婦の主体性を、消費者としての自覚を促すことで推進しようとしていた。

ここで、女性が自ら買い物に出かけ、料理を行うことが重要とされたのは、それが家族の健康管理、そして家庭の維持に繋がるからである。女性の生産活動の一つであった裁縫は、たとえ夫が亡くなっても生活を助けると考えられていたが、村井弦斎は、「料理」とそれに連なる消費活動を女性に促すことで、「家庭」と女性との関係性の強化をはかろうとした。なぜなら、夫、子供を含めた家族の健康維持という再生産行動に女性が主導権をもつてたずさわることで、その自立はあると考えていたからである。

「婦人の将来は如何に成行くべきか」(『婦人世界』大正 11 年第 17 巻第 3 号)では、「私はその賢母を健母の字に換へたいと思ひます」(同、41 頁)と述べ、「簡易質素の生活になると婦人が男子の力を籍る事も寡い為め、自然と独立の気象も出来、母の力も大きくなって、子供を完全に支配し、従って社会をも支配するに至りませう」(同、48 頁)と、女性は「科学的情報」に基づく家族のマネージャーとなるように婦人雑誌読者に説く。制御のためには男子についても無知ではいけないということで、村井には「婦人一代の生活法(6)―如何にして男子を研究すべきか」(『婦人世界』明治 40 年第 2 巻第 2 号、7-19 頁)との記事もある。

こうした村井の主張とともに、女性の消費行動が促されていた様子も『婦人世界』からはうかがえる。例えば「通信」(『婦人世界』明治 40 年第 2 巻第 3 号)を見てみると、『弦斎婦人の料理談』のうちに、飯炊き水減器の事が見えて居りましたが、あれは何処で売って居ますかお知らせ願ひます(浅草 大野芳子)」(127 頁)であるとか、「通信」(『婦人世界』明治 40 年第 2 巻第 3 号)では、『弦斎婦人の料理談』、ひらめの煮凍りのなかにゼラチンといふものがありますが、あれは何処に売ってをりますか。また無害なものですか、伺ひます(神田 池森久子)」といった商品に関する問い合わせが寄せられたことが掲載され、編集部への解答とともに載せられている。

だが、その消費意欲は地方では諦めなければならなかっただろうか。それに対し実業之日本社は、広告「我社代理部の拡張発展」(『婦人世界』大正 4 年第 10 巻第一号掲載)を出して、「親愛なる読者諸姉！我社の代理部は皆様の帝都に於ける代理者となって東京に売って居る品物ならなんでも安く買って上げます(実業之日本社代理部)」と、読者の需要に依っていた。

『婦人世界』の読者欄「通信」には村井弦斎について次のような投書が登場する。例えば、地方の読者からの旅行したときに「村井式」という料理があったという報告の投書では、注文してみたらひどい料理で、「村井」の名が宣伝として使われていることに憤慨しながら

も、地方にも浸透している村井先生の名前に驚いたという⁴⁷。

また、「来年初号から村井先生の小説が出ますそうですね。私は『小猫』以来先生の小説の愛読者でございます（仙台 松葉子）」（明治45年1号）、「村井弦斎先生のお作は、『小猫』以来非常に愛読してをります。殊に今度の『子宝』は実に身にしみて拝読いたしました。

（満州 一女）」（明治45年第4号）など、20年来の読者の存在もみることができる⁴⁸。

村井の小説だけではなく、「私は本誌第一号よりの愛読者です。常に村井弦斎先生御夫婦の御教訓に感謝してをります。そして、御夫婦の著書は大抵読んでをりますが、中でも『婦人及び男子の参考』と『人情論』は古今の名著です。私は、私の友人や親戚の人には是非お読みなさいと勧めてをります（下ノ関 菊子）」（大正3年第9号）との投書もあり、『婦人世界』での村井弦斎夫婦に向けられた内容もあった。

村井は『婦人世界』に常に小説を連載していた訳ではない。いわゆる「家庭生活に役に立つ」記事の紹介が多数を占める。だが、「村井先生」が書いている事実が読者には重要だった。そこに魅力を感じ『婦人世界』を手にとった読者は、当然、その他の料理を始めとした実用記事にも目を向けていったのであろう。

3-2 「料理法」から「健康法」へ

「新家庭」の確立を目指し創刊された『婦人世界』だが、1931（昭和6）年には発行元を婦人世界社にうつし、1933（昭和8）年には非常時を理由に値下げを断行して読者の獲得をねらったが、結局、同年5月で廃刊となった。

雑誌評ではその廃刊理由として、「第一かゝる目標読者層の不確立と第二に文学的要素の過重評価第三女性の日常的興味関心の具体的問題—化粧、流行、料理等々の閑却」が挙げられた⁴⁹。

女性を消費者として奨励した村井弦斎を編集顧問に迎えて創刊されたはずの『婦人世界』で、なぜそうした記事が閑却されていったのか。「新家庭」を担う女性のために登場した婦人雑誌でありながら、しだいに時代に取り残されていった『婦人世界』について村井弦斎を中心に考える。その徴候はすでに大正期に現れていた。

もともと家族の健康維持のため、村井は「食」の観点からの「家庭療法」に力をいれていた。その研究の一つで、読者を驚かせたのが、1911（明治44）年から1912（明治45）年にかけて『婦人世界』に掲載された脚気を直す「弦斎汁」の記事である。米糠を入れた

⁴⁷ 「飛んだ村井式料理」『婦人世界』第7巻第1号、1912。

⁴⁸ 村井弦斎『小猫』は1891（明治24）年から翌年にかけて『郵便報知新聞』に連載されていた。

⁴⁹ 静楽寮人「各婦人雑誌を批判す—五月号を中心に」『家庭』第3巻第6号、1933、123—129頁。

みそ汁を食事に取り入れることで脚気は改善されることが紹介されている。村井弦斎がまとめた『脚気病米糠療法報告書』⁵⁰をみると、二二〇通もの全国から届いた療法実施者から脚気症状が改善したことについての礼状がまとめられている。こうして、村井は世間でも知られる「医者に聞いても博士に聞いても」分からないことを研究する先生となっていた⁵¹。

しかし、「難病の治療法」（『婦人世界』大正8年第14巻第3号）などをみてみると、法や信仰療法を以て、患者の心の欠陥を治し、静座法の如き腹力養成法を以て身体の欠陥を治し、食物療法を以て栄養の欠陥を治するのが、肺結核の内的療法と称すべきものです」（同、65頁）とあり、「食」を通じて独自の「家庭療法」の研究に没頭していった。

その後、村井は1916（大正5）年には「断食の実践とその効能」や、1925（大正14）年「一元同化力の由来」といった健康法を「食」の視点から実行する。しかし、後述するようにそうした記事は、薬品広告や健康に関する身の上相談が一般化する、大正期の消費社会の進展とともに、「流行」に敏感な婦人雑誌が求められるようになる過程で、婦人雑誌の主流から外れていった。

1915（大正4）年の「衣服問題」（『婦人世界』大正4年第10巻第3号）で村井弦斎は、「その利害得失を定めるには、先ず衣服に対する目的を調べなければなりません。元来衣服は如何なる目的によって作られたるものでありませうか。また如何なる目的によって作らなければならんものでせうか」（同、34頁）として、西洋と日本の衣服比較を「実用」の観点から行った。そこで、衣服の「流行」は次のように論じられた。

同年の第五号で流行からみた「衣服問題」を取り上げ、衣服の変遷には「為政者の法令」と「国民の嗜好」とがあり、後者を「流行」と村井は位置づける。「流行は群集心理の趨勢によって起るもので、一人や二人の力で容易に之を左右することが出来ません。」と述べ、自らの失敗談を紹介する。

村井はたびたび三越呉服店から日本服の改良についての意見を求められ「実用」の観点からアドバイスしたものの、販売された商品はまるで売れなかったという。「此において私は実用のもの必ずしも世間に行はれずして、世間の嗜好は多く美という点に向うものだと感じました。されば実用的のものを考案しても、美の点が欠けてゐては世の流行になりません」と分析する。しかし、その後の「衣服問題」もやはり「実用」の観点から論じられ、「多数の考案が陸続と現はれて、幾度も失敗した上、遂に最後の大成したものが世の流行

⁵⁰ 平塚市博物館所蔵。脚気に関する情報は、『婦人世界』に第5巻第5号、1910より「脚気病の特効薬を発見せる弦斎夫人の談話を掲ぐ」他が翌年までたびたび掲載された。

⁵¹ 一記者「弦斎先生の新著」『婦人世界』第10巻第10号、1915、実業之日本社。

を惹起こしますから、心ある人は常に衣服の改良といふことに向って精神を注がれ度いものです」(同巻、第7号)、と述べ、実用的な衣服と人が認めたものが「流行」なのだという姿勢を崩さなかった。

そこに、村井弦斎が婦人雑誌の主流から取り残されていくのがみてとれる。『婦人世界』も、上流階級の婦人や女性教育家や文学者による寄稿が多く、時代の流れに敏感に対応できる編集体制ではなかった。村井弦斎は死去する1925(大正14)年まで、社会生活の研究家として殊に健康と食物の問題に取り組む。三十五日の断食を実行したり(「断食の実践とその効能」大正5年第11巻)、また、武州恩御嶽山で山中生活(大正10年第16巻「武州御嶽山に於ける私の山中生活」)を行ったりしながら書かれた記事には、彼の独自の世界が展開されているが、読者の興味とは乖離していった。

1926(大正15)年、自らが動脈瘤にかかっていることを知ると、自らの病状を観察してメモを取った。その克服法、闘病生活の心得を確立し、人々の役に立てるためである。この闘病生活にあって「この病気から一大学説を発見したから『婦人世界』に連載発表し、あとでまとめて本にしよう」と語ったと言う。だが、1927(昭和2)年7月3日、この一大発見は『婦人世界』読者に伝えられることはなく、村井弦斎は死去した。

皮肉なことに、村井の没後、婦人雑誌のなかでも「教養派」雑誌といわれてきた『婦人公論』の編集方針が変わり、1927(昭和2)年第12巻第7号より食関連記事が増加する⁵²。1928(昭和3年)には、元『婦人世界』編集長・高信峽水が『婦人公論』の編集長となり、村井弦斎婦人である村井多嘉子の料理記事が『婦人公論』に掲載され始め、村井の料理記事の流れは『婦人公論』に受け継がれたのであった。

村井多嘉子は、「温かくて手軽な鍋料理」(1号)、「滋養のある病人料理」(3号)、「季節向の野菜料理」(5号)、「季節向の風変わりな酢の物料理」(6号)、「パンに向く副食物」(7号)などを『婦人公論』に掲載している。

また、講談社から初の百万部雑誌『キング』が創刊されるなど多くの雑誌が大衆化し、大衆の意向を考えずして雑誌は成り立たない時代となった。婦人雑誌でも雑誌間の競争は激化し、後発の婦人雑誌である『主婦之友』(主婦之友社)や『婦人倶楽部』(講談社)との差異化を迫られた。新しい編集方針を打ち出そうとした『婦人世界』だったが、それは大衆化の流れに逆らうものであった。1928(昭和3)年、編集部により「婦人世界の立場について」と題された、新しい婦人雑誌開拓にむけての決意表明をみてみよう。

編集部は、多くの婦人雑誌が自己の使命と本分を忘れがちだと指摘し、内容よりも発行

⁵² 鳥井衛子「『婦人公論』に掲載された食関連記事について」近代女性文化史研究会『婦人雑誌にみる大正期—『婦人公論』を中心に』1995、雙立印刷。

部数優先の雑誌となっていることを批判、「売れる雑誌たる前に、よき雑誌たることです。それより外に、断じて打開の道はありません」と新しい編集方針を打ち出した。これは、「教養派」といわれた『婦人公論』が大衆向けに編集方針を変更した同年に、「実用派」とされてきた『婦人世界』が「実用」よりも女性の生き方を議論する雑誌となっていた。

消費者として女性に主体性を持つようにと村井弦斎が説いた婦人雑誌である『婦人世界』が、多数の婦人雑誌のなかから読者に選ばれる時代になって、苦戦を強いられたことは皮肉であった。

4. おわりに

「家庭料理」は西洋料理の知識が家庭の女性に伝達され、女性が家族の健康を考えながら選択した食品を使って調理した料理として誕生した。「家庭料理」の成立には、雑誌や新聞で新しい料理情報を入手できるようになり、日々の献立が家族の健康のため栄養の観点から考えられるようになること、そして流通する商品が増加し、消費者が先の視点に従ってそれらを選択できるようになることが不可欠となる。その消費者こそ女性であった。

そうした情報をこの時代に提供した代表的人物が村井弦斎であった。現在、日々の食事の買い物は各家庭にとって重要な仕事となっている。その起源は、明治から大正にかけての日本でも資本主義が確立する過程で様々な商品が登場し、輸送機構の発達や市場の拡大するとともに、都市が個人の食に関する消費物資を生産しなくなった時代にある。その物質的拡大により維持される家庭生活において、「栄養」と家族の健康を念頭に置いた「家庭料理」が必要とされたのであり、毎日の買い物という消費によって成立する生活を女性が中心になって担うことが求められていったのである。

一般に消費者としての女性といえば化粧品や衣服を購入する女性がイメージされるが、食料品を購入する女性に消費者の登場を見ることができよう。そうした日用品の買い物歩きが必然的に消費生活を発展させ、その他の消費も促すようになることは想像に難くない。また、かつて女性が「料理」することが自明のものではなかった以上、日々の食料品を買い出し、家族の健康維持を目的として料理する女性に近代的女性の姿をみることができるのではないだろうか。明治から大正にかけての消費社会の萌芽期に村井弦斎は、消費者に自主的で積極的な意志をもった女性を見出していたのであった。当然ながら、その主張は上流階層の婦人から女中まで、将来「家庭」を担うようになる女性すべてに向けられていた。

木村涼子は1917（大正6）年に創刊された『主婦之友』の主婦役割の合意形成機能をも

った婦人雑誌とする分析を行っているが、それはメディアの操作性だけでなく、婦人雑誌の情報を積極的に「読む」読者の主体性を指摘するものである⁵³。この自律的な女性読者とともには日本の婦人雑誌は発展したのであり、また「味の素」に代表される食品広告にみられるような女性消費者への宣伝も登場したのである。大正期には、女性が婦人雑誌の読者として雑誌を選択し情報を読みとる姿に、積極的な消費者の姿を見出し、女性的文化形成の第一歩を見出した人物もいた⁵⁴。

しかしそのために、ファシズム期には積極的国策協力という合意形成をという機能を果たすであろうことを見通した『主婦之友』の考察を木村が行ったように、村井が唱道してきた、消費者として節約につとめ、家族の健康を気づかう「家庭料理」の心得は戦時期にふさわしい料理として読者に提示されても違和感がなかった。1937年「骨の料理」と題された村井多嘉子の料理記事は、家庭では一般的に捨ててしまう骨こそ「本当の妙味」があることを紹介したものである⁵⁵。

この記事を「銃後を守る吾々としては出来る丈の努力をして後顧の憂なき様致し度いと思ひます。長期に亘る事変に際しては食料問題が第一で第一線で活躍する将兵に充分な手当てをする為め出来る丈の努力を致し度いです」と考える雑誌編集側は茶懷石料理を紹介した八百膳主人栗山善四郎は「一寸時期外れで気の毒」と評したが、故弦斎夫人の料理は「実際問題としては必要なこと」として、戦時にふさわしい料理とされたのである。

もともと、日露戦争時に村井弦斎がその必要性を唱えた「家庭料理」は、総力戦であった一五年戦争において、銃後を守る女性に強く意識されるようになったのではないだろうか。

(いしだ あゆう・博士後期課程)

⁵³ 木村涼子「婦人雑誌の情報空間と女性大衆読者層の成立」『思想』812、1992。

⁵⁴ 室伏高信「感覚誘惑」『改造』10月号、1922。

⁵⁵ 村井多嘉子「骨の料理」『食養』第9巻第9号、1937、食養研究会。

The Modern Image of the Consumer According to a Novelist Murai Gensai in the *Meiji* Era

Ayuu ISHIDA

The image of people usually have of the female consumer today is the one of a buying cosmetics and clothes. However, originally female consumers were associated with housewives.

Both images reflect the deep relation women had their home, in addition to increasing role women played throughout the process of social modernization.

The aim of this article is to examine the Japanese magazine, "Fujin Sekai" ("Women's world"), one of the first mass magazines for women. I would like to clarify the image of the housewife whose main activities are cooking and shopping as an ideal and as an active female consumer at the same time.

Nowadays to go to the supermarket to buy some food every day represents an important task for housewives. But in early modern Japan, shopping was unusual activity for women in general, as it was reserved to professionals like maids or cooks. Cooking was not a daily work for some women.

I examined some articles about women cooking that Murai Gensai, a famous novelist of the Meiji Era, wrote on "Fujin Sekai".